

Title	滑石製祭祀用具再論
Sub Title	Lion bowls and miniature springs
Author	小川, 英雄(Ogawa, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1982
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.52, No.2 (1982. 9) ,p.23(187)- 34(198)
JaLC DOI	
Abstract	During the Japanese Archaeological Expedition's third field work at Tel Zeror, Israel, in 1966, a fragment of a steatite lion bowl was excavated from one of the Iron Age strata at the site. The bowl belonged to an unknown ritual practiced over a fairly wide area of the Fertile Crescent (mainly in Assyria and Syria-Palestine) during the ninth to seventh centuries B. C. It seems likely that the ritual was related to the cult of Ishtar, the Assyrian goddess of warfare and afterlife. In later periods, this ritual, accompanied by extremely peculiar cult objects, was altered but continued to reappear intermittently in various regions of the Near East and Europe. The last stage of diffusion was that of the so-called "Miniaturbruunen." Description of this later development of the ritual and its spiritual content is a fairly difficult undertaking.
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820900-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

滑石製祭祀用具再論

小川英雄

序

日本オリエント学会派遣発掘調査団は、一九六六年夏に、イスラエル共和国国内テル・ゼロール遺跡において、第三次発掘を行なった。その期間中に、「北のテル」A II地区S 20のグリッドから、滑石製祭祀用具断片⁽¹⁾が出土した。これについては既に発掘調査報告書に記載がある。又、筆者はこの出土物について特に調査を行い、多くの先輩・同僚の助言の下に、二、三の論文を執筆して来た⁽²⁾。発見以来一六年を経た現在、それ等の論文において十分に解明出来なかつた点も残っているし、その間に刊行された関係文献もかなりな量に達した⁽³⁾。

滑石製祭祀用小鉢の問題点としては、その特異な材質、構造、装飾文様などがあるが、用途や分布、年代についても著しい特色がある。本稿においては、特に東地中海域における分布と後世における類似品の流布について考察を加えたい。

まず本稿に関係がある限りで、この特異な出土物について概略を述べておく。二、三の例外を除いて、材料は滑石(ステアタイ

ト)である。本体は人間のてのひらに乗る程度の大きさの鉢形容器であるが、一本の把手がつく。それは中空になっていて、いわば把手がさし込まれていた別の容器と、この鉢の内部とをつなぐチューブの役目を果している。これは多分、液体(多分ミルク)を蓄えた皮袋など損壊しやすい容器から、チューブの部分を通して、鉢内にその液体を流し込むための道具であった。その使用目的は装飾文様などから推して祭祀用であり、都市国家の緊急時(包囲戦など)に、戦の女神(例えば、イナンナ、イシュタル、アナット)に敵軍調伏を祈願するために用いられた。

この種の祭祀が西アジアで行なわれたのは、前九世紀から同七世紀にかけての後期アッシリア時代であり、アッシリアの軍事征服に対する周辺諸都市、諸民族の抵抗と関係がある。この祭祀については、文献史料は存在しない。容器の形態と文様に著しい固定化がみられ、年代的発展が見られない。これはこの道具を使用して行なわれた祭祀自体が固定し、約三〇〇年の間同一の性格を保ったことを暗示している。

一、北シリアの一括出土物

古代アパメアの近くのオロンテス川沿いに、沼沢地ガブ(Ghab, Ghard)⁽⁴⁾があつたが、それは一九六〇年代に干拓されたものと思われ⁽⁴⁾る。その際、タンジャラ(Tanjara)と呼ばれる場所から、多数の滑石製品が出土し、大部分は市場に流れた⁽⁵⁾。そのうち四個はベイルートのアメリカ大学の博物館に収蔵され、Stucky⁽⁶⁾が研究を發表した。これ等の出土物を見ると、形態もこれまでに知られてきた滑石製祭祀用具のカテゴリーを出るものは殆んどなく、前九世紀から同七世紀にわたって、シリア・パレスティナ、アッシリア、イランなどの広い地域で発見されてきた数十の実例と照応している。例えば、層位上前九世紀前半と考えられるテル・ゼロールのものと同じく、十字の帯状文様を器体外壁にもつもの⁽⁷⁾と、より新しい年代の実例と同じ文様をもつものが、タンジャラでは一括して出土したと見られる。このことは、このジャンルの石器とそれを用いた祭祀とが、最初から終わりまできわめて固定化されていたことを示している⁽⁸⁾。

Stucky が挙げていた四個のうち、最後の一個は、材質と(特にライオン頭部の)表現様式とが他のものと共通であるが、他方では独特の形態をもつ。これが他の三個や他の地域からの出土物と同一のジャンルの石器であるかどうかについて、疑いをさしはさむ余地がないわけではない。それはほぼ円形の口縁部(内径四・八センチメートル)を持つが、全体として下ぶくれの丸味を帯びた容器である。その最も深い側(高さ六センチメートル)の下

部には、外側にライオン頭部の彫像が壁面から一・八センチメートルほどつき出し、その口は容器内部と蛇口のような形で連絡している。この側面に容器の最深部があるが、その向い側は最も浅く、高さ四・八センチメートルである。従つて、底面と口縁は平行でなく、口縁部から入った液体は、残らずライオンの口から流出したであろう。外壁の文様は四つの欄から成る。無文の口縁部の下には、平行して走る二本の波線が刻まれ、それは二本の区分線によつて、市松文様の第二欄と区切られている。後者は器体が最もふくれた部分において、矢印又は「にしんの骨」状の文様を並べた帯によつて区切られ、その下は再び市松文様となる。底面には文様は見られない。

Stucky はこの容器をリュトンと呼ぶ。ライオンの口に栓をしない限り、容器内に液体をとどめることは出来なかつたはずである。これは灌奠(Libation)の儀式中において使用されたものである。他の滑石製容器と比較すると、ライオンの口腔から液体(多分ミルク)⁽¹⁰⁾を流出させるという点で共通であるが、それが器内に対してか、器外に対してかという点では異なる。「リュトン」の方は他に例がない⁽¹¹⁾ので、これがもし同一ジャンルに属するとすれば、タンジャラの製品の特徴であつたか、それ以外の土地では他の材料を使った容器によつて代用していたかであろう。実際、滑石製容器の把手がはめこまれていたもう一つの容器は、現在まで発見されていない⁽¹²⁾。それも、「リュトン」の原型も皮製品であつた可能性がある。「リュトン」外壁の斜線による市松文様や帯状文様は、皮袋を保護するための材料を表わしているかも知れな

い。

二、エーゲ海域における分布

滑石製祭祀用具を使用した、前九〜前七世紀の信仰は、専ら戦の女神イシュタルに対するものであり、それは当時のアッシリア帝国のシリア・パレスティナや北方の周辺民族に対する侵攻と関係していた。それ故、滑石製容器の主要な分布は、それ等の地に限定されていた。このことは出土地の分布から見て明らかである。

しかし、アッシリアの侵略が及ばなかったエーゲ海域においても、このジャンルの出土品が散見されるのはなぜであろうか。

まず、サモス島の神域で発見された滑石製小鉢⁽¹³⁾がある。鉢の底部は片手の浮彫が覆い、把手部にはライオン頭部がまたがり、その両手が鉢の口縁部をかかえている。口縁部上面には、ほど等間隔で合計六個の小さい穴⁽¹⁴⁾がうがたれているが、ここにはハーサンルーの場合と同じように何か⁽¹⁴⁾がさし込まれたのであろう。これは一緒に発見されたエジプトやアッシリアの美術作品が示すように、明らかに輸入品であり、神殿の財宝の一部をなしていた。多分、実際の儀式では用いられなかったであろう。

次に、クレタ島の出土物を見なければならぬ。ここでは滑石製ではなく、象牙製の小鉢⁽¹⁵⁾が発見されている。西アジアで象牙製のものがどれだけ流布していたかは分らない。滑石製のものの原型の一つと思われる、後期青銅器時代のメギッド出土象牙細工グループ⁽¹⁶⁾の一作⁽¹⁶⁾を除くと、このジャンルの容器で象牙製のものは

残っていないが、これは象牙が保存されにくいからとも思われる⁽¹⁷⁾。クレタ島のもの⁽¹⁸⁾の出土地は、イダ山のゼウスをまつた洞窟であり、象牙製の容器はそこに奉納された多くのオリエント産製品の一つであった⁽¹⁹⁾（前八〇〇年頃）。

このように、アッシリア帝国の軍事的支配圏の外の世界では、このジャンルの容器は聖所の宝物であり、その本来の祭儀上の意味は失なわれていたと思われる。しかし、このことはオリエントの地母神の崇拜がこの島では全く忘れ去られていた、ということの意味するものではない。

同じく、イダ山の洞窟内から出土した青銅製の楯断片には、打出しの技法によって、裸の女神がその両側にライオンを従える図⁽²⁰⁾が描かれている。縁には絡縄文様が見られる。これは前七世紀の北シリアで製作されたとされている。この女神は多分、戦の女神としてのイシュタルであろう。但し、これも又奉納された神殿の宝物の一つであったから、地母神の戦神としての性格が直接意味を持ってはいなかったはずである。即ち、その女神は儀式の対象ではなくなっていたが、それにもかかわらず、このオリエント起源の女神の地母神としての神性は理解されていた、と思われる。そのことは、次に述べるクレタ島製彩色祭祀用鉢型土器のライオンの頭部が、この楯のライオンの頭部と同一の表現で描かれていることから知る事が出来る。

ハイデルベルク大学考古学研究所には、他に類例のない祭祀用土器が所蔵されている⁽²¹⁾。その最も保存状態のよい部分は丸い水筒形の器体をもつ液体容器で、その扁平部分のうち一方は底部をな

し、その反対側の上部の中央には、円形の穴があいている。そこにはこの容器の頸部があったと思われるが、現状では欠損している。この容器の直径は一三・一センチメートル、高さは四・センチメートルである。その胴部の一個所にライオンの頭部が高浮彫で現われ、その口腔はより小型の、内ぞりの口縁部をもつ浅鉢を咬んでいる。又、ライオンの両手は前方にのび、その浅鉢の口縁部をつかんでいるが、右手の先端は失われている。浅鉢はその口縁部のほゞ五分の二、器壁のごく一部を残すだけなので、全容を知ることが不可能であるが、直径は約一センチメートル、高さは約三・五センチメートルであったと推定される。この鉢はライオンの口腔を通じて液体容器の内部と結ばれている。Hampeが欠損部分の修復した上で行った実験によると、この器具の液体容器上面の穴を手で開閉することによって、鉢内に流入する液体の量を調節出来るという。土器の肌は明色(オーカー、オレンジ)であるのに対して、暗色(黒系統)の彩文が施されている。単純化されたライオンの顔を含めて、手書きによるきわめて装飾的な文様がほゞ全面を覆っている。ガブの「リュトン」と同じように、いくつかの水平な欄に分たれているが、底面は塗りつぶされている。

このハイデルベルクの祭祀用具を、オリエントの滑石製の鉢と比較してみると、ライオンの口腔から液体を鉢内に注ぎ込む装置であるという点で、両者は本質的に同一の機能と用途を持つと云えよう。大きさ、ライオンの様子もほゞ同じである。相違点の第一はこれが土器である、という点であるが、すでに沙岩製、「エ

ジプト青」製、象牙製などが存在している上、特色のある彩文土器が発達したクレタ島で、このような新しい試みが行なわれても不思議ではない。第二は、そのおかげで・オリエントにおいては知られることのなかった液体容器の部分が、はじめて明らかになつた点である。勿論、滑石製の小鉢がこのような水筒型の滑石製の容器にはめ込まれていたとは考えられない。片方だけが遺存するということは不自然だからである。むしろ革袋又は、そこから出たチューブに把手部分が接続していたと思われるが、ガブの「リュトン」はその特異な形から見て、原型は皮袋であり、それを滑石によって模倣した結果、液体容器下部のライオンの口腔と鉢とが切り離される結果になつたのである⁽²⁴⁾。

では、ハイデルベルクの土器部分の原形も皮袋に求められるであろうか。この点については、Stucky⁽²⁵⁾や Salomonson⁽²⁶⁾はハイデルベルクのものオリエントにおける類似品として、鉄器時代の水筒形土器(“Pilgrim Flasks”)を挙げている。この型の土器の多くは上向きの口縁部と頸部を持つが、時として口縁部が胴部と同一の向きになり、両把手がライオンの両手に類似した位置を占めるものがある。そのような場合、それとハイデルベルクの容器との類似性は著しい。更に時代をさかのばれば、水筒形土器も皮袋であつたと思われるが、ハイデルベルクの容器を製作した陶工の頭に思い浮かんだものは、そういう遠い時代の皮袋ではなく、同時代パレスティナの水筒形土器であつたろう。

Hampeの論点のうち、本稿にとって意味のあるものをいくつか紹介しよう。彼はハイデルベルクの祭祀用具の直接的な類似品

として、クレタ島のアルカダスの円天井墳墓から出土したライオン像付の土器に着目した⁽²⁷⁾。これは液体容器の部分が水筒の胴部の形ではなく、蹲るライオンの形をとり、中空のライオンが両手をかける鉢は、口腔を通じてではなく、鉢の器壁の穴によってライオンの体内と通じている。文様やライオンの表現様式はハイデルベルクのものと同様と類似している。アルカダスのものは前六五〇年から同六二五年の間とされているが、Hampeはハイデルベルクのものとはそれと同時代か、その少し前であり、製作工場は同一であったとする。しかし、用途については⁽²⁸⁾、これは副葬品ではなく、不老不死を願う祭儀のためとした。Hampeは上述の通り、この祭具を復元し、水筒部分の穴を手で開閉させることにより、液体が鉢内に流入するのを調節した、と考えているが、そのことはこれが祭儀において実際に使用されたことを意味している。

オリエントの滑石製祭祀用具は、戦の女神イシュタールを祭神として行なわれた、戦場の祭儀のものであったが、前六一二年のニネヴェの陥落によってアッシリアの侵攻の危険が消滅すると共に、この祭儀も必要でなくなった。

Hampeはハイデルベルクのもの祭神として、同じく地母神⁽²⁹⁾を考える。それはライオンの口腔から液体を流出させる、というこの装置が、当然要求している説明であるが、オリエントの滑石製祭祀用具の研究者たちが思い到らなかったことである。Hampeの説を要約すると次のようになる。このライオンはオリエント起源の大地母神を表わしている。彼女は青銅器時代のエーゲ海世界にすでに渡来し、愛と戦の女神、獣たちの女主人として崇

拝されたが、ホーマー以後その神性は分業によって幾柱かの女神に分たれた。そのうち愛の女神アフロディテは復活の若神アドニスとペアで、当時のクレタ島では冥界神でもあった。彼女に対する儀式の一つは、同じくオリエントから伝来された香油の奉納であった。香油は不老不死をもたらす聖なる秘薬とされたことでも分るように、アフロディテは「香油の女主人」であった。ハイデルベルクの祭祀用具のライオンが香油を吐き出すのは、不老不死を授けるためであった。

このような宗教的背景は確かに存在したであろう。しかし、前七世紀中葉から後半にかけてのクレタ島に、そのような形の地母神崇拜が現われるのはなぜであろうか。又、それはなぜ、前九世紀から前七世紀までのアッシリア帝国時代オリエント特有の祭祀用具を採用したのであるうか。不老不死に対する願望と軍事的破壊からの救済祈願とは、実は同根であり、原始時代の地母神の冥界神的性格に由来している。アッシリア軍の侵攻を受ける世界では後者が、その圏外の世界では前者が同一機能の祭祀用具で祈願されたとしても不思議ではない。七世紀のクレタ島には、アッシリアの攻撃を逃れたオリエント系の亡命者や居留民が多数住んでいたと思われるから、彼等の影響でこの祭祀が再出発したのであろう。

三、ヨーロッパにおける隔世遺伝

前七世紀を過ぎると、この祭祀はオリエントにおいても、地中海世界においても殆んど姿を消してしまふ。しかし、ユトレヒト

大学考古研究所長の Salomonson 教授は、一世紀後半から二世紀にかけてライン川流域で流行した「ミニ泉水装置」(„Minia-turbrunnen“) について。その用法に数世紀前の祭祀用具と共通のものがあることを指摘された。

コブレンツに近いケルリヒ (Karlrich) のローマ帝政初期の火葬墓の副葬品として、中空円環付祭祀用土器が出土した。⁽³⁰⁾ 古物商の手で博物館に持ち込まれたので、詳しい出土状況は不明である。まず、外径一四センチメートル、太さ二・九センチメートルのドーナツ状中空円環が台の役目を兼ねる。環の上には外開きの口縁部を持つ浅鉢、その向い側の環上には上部が欠損した壺形の容器がのっている。後者の両側には、それぐ一頭の蹲るライオンがいて、浅鉢の口縁部に顔を突き出し、口を開いている。ライオンたちの口腔には穴があり、それはライオンの躰を経て、中空の円環に通ずる。壺形容器の下部も円環に通じている。全体としてみると、壺形容器に十分な量の液体が注ぎ込まれると、それは円環を経てライオンの口腔に上がり、更に浅鉢に放出される仕掛けとなっている。

これに似た出土物はライン川流域各地から報告されているが、動物部分だけというように断片が多い。最も参考になるのはトリエル出土のもので、⁽³¹⁾ 円環・浅鉢、野猪頭部から成り、一頭の野猪が鉢の口縁部を咬む。断片的な出土品から見て、動物はこの他にも野兎・鹿・猿などであってもよかつたらしい。

Salomonson 教授はこれ等の土器の産地を、ローマ時代にも鉱泉による病氣治療の場所として有名であった聖地ヴィシー及び

その周辺とし、そこに巡礼に来た人々がこの容器に聖水⁽³²⁾ (ミネラル・ウォーター) を入れて故郷に帰った、と考えている。彼は又、この祭祀用具でまつられたのは医療の女神サルス (Salus) であつた、と示唆している。⁽³³⁾ この女神は古くからローマ市で信仰されていたが、帝政期にはヨーロッパ各地の病氣治療用鉱泉の守護神でもあつた。古くは麦の穂をシンボルとしたので、地母神的起源をもっていたであろう。従つて、巡礼たちの故郷で、クレタ島の場合のように副葬品となつても不思議ではない。要するに、ヴィシーの祭祀用具では、滑石製の祭祀用具のライオンが二頭になつたり、他の動物になつたりすることがあり、又把手 (チューブ) の部分が円環状の台になつたりしてはいても、聖獣が聖なる液体を吐き出すという装置であることには変りがない。又、祭神が地母神であることも同じである。

しかし、前七世紀に消えた祭祀用具が、数百年後にライン川流域やフランスで復活したのはなぜであろうか。Salomonson 教授は両者の間に直接的関係はなく、むしろヴィシーのものと後述のティグリス河畔のセレウキアのものとの共通の祖型があり、それと前七世紀までのオリエントやクレタ島のものとの間に、更にもう一つの祖型があつた、と考えているようである。⁽³⁴⁾

この祖型については勿論不明のまゝであるが、筆者は教授自身も言及している二つのフェニキア系の出土物の意義を強調したい。第一は、テュロス (レバノン) の近くのウン・マル・アマツド出土の石碑である。⁽³⁵⁾ コペンハーゲンにあるこの有名な石碑には、フェニキア人の神官パールヤトンが神に奉納する図が浮彫さ

れている。彼は右手を立て、左手には鉢状の容器をのせている。その容器の後方には、何か特異な付属品がついている。教授はこれをクレタ島などで発見された上述の祭祀用具の伝統をひくものではないか、と考えている。全く同じとは云えないのは、この石碑の年代が前四世紀後半或はヘレニスティック時代とされているからである。そのころには滑石製（或は土製）の祭祀用具の存在を考古学的に確認することが出来ない。しかし、前九世紀から前七世紀にかけての神官たちも、パールヤトンのような姿で祭祀用具を使用したであろう。滑石製祭祀用具の伝統が、フェニキア人の世界に伝えられていたとすれば、それがヨーロッパにまで到達しても不思議ではない。このことは、もう一つのフェニキア系出土物によって傍証されよう。

それはスペインのグラナダ州ガレラにあるトゥトゥヒ (Tutuhi) の墓域の第二〇号墳墓から出土した副葬品で、女神坐像のアラバスター彫刻である。⁽³⁶⁾これは高さ一七・八センチメートル、幅は最長部分で一〇・六センチメートルの中空の鉢をもち、頭上の穴から注ぎ込まれたミルクが、女神の着衣から突出した両乳房の穴を経て、女神の膝の上にその両手によってかかえられた鉢の中に流出する装置である。女神の両側には有翼のスフィンクスが蹲る。このスフィンクスの胸飾りには絡縄文様が見られる。以上の描写によって知られるように、装置の機能自体も、地母神像、絡縄文様、手で支えられた鉢、スフィンクスなどの存在は、⁽³⁸⁾前九世紀から前七世紀にかけての滑石や土製の小鉢と共通する。これは単なる類似という以上に、同じ宗教的伝統を想定させる。他

方、皮袋など消滅しやすい材料でつくられていたと思われる液体貯蔵用の容器の部分が女神の鉢であり、ライオンの口腔が女神の乳首であるという点は、ガレラのものの特徴であるが、それは却って、ライオンが女神の顕現形態の一つであったこと、皮袋などの液体容器は女神の鉢そのものを意味していたことを示すものであろう。

さて、トゥトゥヒの墓域の年代は前五世紀から同四世紀とされ、前述のパールヤトンの時代に接しているが、柳宗玄氏によると、女神の表現様式の厳密な左右対象性、ヒエラティックな完成度などは初期鉄器時代の人体表現の伝統をひいている。それ故、この彫像に関する限り、上限を前七世紀のシリア・フェニキア美術の作品にまでさかのぼらせることが出来るという。又、この墓域の副葬品にはギリシアやフェニキアの文化的影響を示すものが他にもある。それ故、この女神像は、前七世紀の滑石製祭祀用具の終末期の宗教的伝統に接続しているとも見られる。この女神の名前については、単に豊饒の女神とも、アスタルテとも云われているが、クレタ島の場合のように、オリエンティックの地母神の姿を表わしているにちがいない。その他にも、当時の地中海沿いのスペインには、フェニキア的、地中海的な地母神像の絵画、彫刻が多かった。

以上二つのフェニキア系の遺物は、滑石製小鉢と「ミニ泉水装置」の近縁性が生じた原因を説明してくれるように思われる。

四、オリエントにおける隔世遺伝

この問題に関連して、Salomonson 教授はイギリス河畔のセレウキアの出土物にも着目した。⁽³⁹⁾ 彼が発掘者たちとの文通によって調査した結果によると、セレウキアの第三層（前一四一年—後四三年）と第二層（四三年—一一六）年の一般居住区域から、ケルリヒの祭祀用具と酷似した出土物があった。それは断片を含めて合計一八件あり、大多数は第二層に属するので、第三層のも的一件もローマ帝政期と同時代であり、結局年代的にはライン川流域のものとは一致する。両者の相違点は二つあったようである。第一に、メソポタミアのものは墓域からではなく、私宅の遺構から出土したので、家内の祭儀で用いられていたように見える。第二に、円環上の動物はライオンや野猪ではなく、水に棲む動物（亀や魚）であった。又、Salomonson 教授によると、用いられた液体はミネラル・ウォーターではなく、ここでは香油であった。亀や魚はアフロディテやアタルガティスのような地母神のシンボルであったから、セレウキアの祭祀用具はやはり、地母神をまつるためのものであったであろう。

当時のセレウキアはパルティア帝国の支配下にあり、ローマとは敵対関係にあった。第二層の最後の年（一一六）のトラヤヌス帝のメソポタミア遠征によって、その関係はきわまった。それにもかかわらず、ヴィシーの祭祀用土器とセレウキアのそれとの間に、著しい類似が見られるのは何故であろうか。Salomonson 教授はその問題について、(A) 両者の類似は偶然、(B) 直接的

交流の結果、(C) 共通の祖型の存在、という三つの場合について論じ、(C) の立場を正しいとした。⁽⁴⁰⁾ いずれにしても、セレウキアの出土物は広大なオリエントにおいて、余りにも孤立した存在である。このヘレニズム都市の中で土着民の文化が反撃に転じた結果の現象であるとすれば、滑石製祭祀用具となんらかの形で接合する伝統がどこかに潜んでいたのではないかと想像される。

最近になって、「エジプト青」と滑石の祭祀用具を出土させたハーサンルーからさして遠くないマルリックの、特異な出土物が報告された。その初期鉄器時代の王墓群のうち、第三六号墓から中空の男女土偶が発見された。⁽⁴¹⁾ 高さ三五センチメートルから四六センチメートルでいずれも足の指が六本づつある。ほゞ全裸で、入念さと不正確さとが共存する原始的美術作品といえる。男女共に、性器の明瞭な表現を一つの特色とするが、男子像は武器をたずさえる場合は、戦士を表しているようである。本稿に関連して注目されるのは、男二体、女一体の奉納者立像である。⁽⁴²⁾ これ等は胸に長大な注口をもつ壺をかかえている。その一つは、壺を前方に傾けさえしているもので、器内の液体を注口から流出させようとしていることが分る。問題はこれ等三像の体内と壺の下部とが、像の胸又は腕と接合し、体内から壺へと灌奠用の液体を流出させることが出来た、という点にある。この容器全体の原始的な表現様式、恐らく滑石製祭祀用具よりもやゝ先行すると思われる年代、奉納者の立場と神官の立場の区別のない状態、シンボルの欠除、これ等すべてはアッシリア帝国時代の都市国家の祭儀よりも稚拙な段階を示すように見える。しかし、これによって鉄器時

代の初期（多分前一〇〇〇年頃）から、このような装置がオリエントに存在していたことは事実である。多分、その背後にある祭儀の観念は後代にまで伝えられ、それがある時期に、やゝ異ったよそおいの下に再び姿を現わすのではないか。

滑石製祭祀用小鉢の図像的、構造的起源は、かつて筆者が論じたように、後期青銅器時代のアナトリア・北シリア・エジプトなどに求められる⁽⁴³⁾。しかし、ヴィシーやセレウキアの祭祀用具がその隔世遺伝的現れということでは十分に説明出来るとは思われな⁽⁴⁴⁾い。ヴィシーやセレウキアのものには、皮袋の液体容器を想起させるものがないからである。そこには、マリリックの器具にみられるような、より原始的な土器の伝統も加わっているのではないか、と思われる。

要約

前九世紀から同七世紀までのアッシリア時代に、戦争にかかわる地母神の祭儀があり、それは滑石製の灌奠用具を使った。その伝統はエーゲ海世界にまで伸びていたが、ここではむしろ本来の豊饒神としての地母神の祭儀となった。その後、この信仰は姿を消したが、多分、商業民族フェニキア人によって人知れず保持され、ヨーロッパに運ばれた。この祭祀用具の伝統は多少とも変形して、ローマ帝政期のヴィシーの聖水崇拜の中に現われた。他方、それはオリエントでも、ティグリス河畔のセレウキアにおいて再び姿を現わした。ローマ・パルティア時代のこのジャンルの器具には、多分、滑石製祭祀用小鉢には由来しない伝統（例えば、マリリックの土偶が属した伝統）も入り込んでいた。

滑石製祭祀用具再論

この祭儀の伝統ははじめから終りまで、ほとんど完全に文献史料を欠いている。多分、鉄器時代の強固な父権社会では、地母神にかかわる母権的伝統の信仰は、文字による記録から除外されていたのであろう。しかし、以上の研究により、地母神の信仰は紀元後の時代に到るまで祭儀の対象として生き続けていたことが明らかになった。

〔付記 本稿作成に当っては、小野山節（京都大学）、岡田明憲（東洋大学）、J. W. Salomonson（エトレヒト大学）の各氏に御教示をいただいた。厚く御礼申上げる。〕

註

- (1) K. Ohata, ed., *Tel Zoror III*, 1970, p. 20; 34f.; p. 37; p. 37; pl. LXIII, 4.
- (2) H. Ogawa, *A Steatite Bowl from Tel Zoror, Orient VII*, 1971, pp. 25-48. 拙稿「テル・ゼロール出土滑石製祭祀用小鉢断片について」、オリエント、一四一一、一九七一、一三三—一六二頁。同上、滑石製祭祀用小鉢と前二千年紀前半の地母神崇拜、ユダヤ・イスラエル研究、一〇、一九八二。
- (3) テル・ゼロール自体については、この滑石製祭祀用具が出土した北のテルの第九層に関する、後藤光一郎氏の研究（テル・ゼロールの聖所、オリエント、二三一二、一九八〇、二七三—四頁）がある。後藤氏はその中で、北のテルのS/R両トレンチの第二、四次発掘の成果を総合し、そこには聖所の痕跡、祭祀用小鉢型土器、動物像、骨片、祭儀用パンの粘土製模型、香

炉断片など)が見られるが、神殿そのものは消滅したとした。多分、ここはソロモン時代にはヘブライ人の王国の地方行政機関所在地であったらしい。祭祀用滑石製小鉢も、この“temple fort”に所属していたのであろう。

(4) Cf. A. Parrot, *Syria* 41, 1964, p. 234; K. Galling, *ZDPV* 86, 1970, pp. 1-3.

(5) わが国にもその一つがもたらされ、石黒孝次郎氏によって所蔵されている。Mikazuki, *Catalogue of Near Eastern and European Antiquities I*, 1964, p. 6, No. 2. 筆者は同氏の御好意によって、それを実際に見ることが出来た。

(6) R. A. Stucky, *Vier Löwenverzierte Syrische Steatitgefäße*, *Berytus* 20, 1971, pp. 11-24.

(7) *Ibid.*, pl. 2.

(8) タンジヤラの地がこのジャンルの石器生産の中心地であったのか、或はそこにこれ等を用いる祭祀の中心地があったのかという問題については、更に調査研究がなされるべきであるが、現在のところ真相は不明である。Stucky (*op. cit.*, p. 14) はこれ等の作品は同一の工場で作られたとしている。

(9) Stucky, *op. cit.*, p. 17; pl. 4.

(10) 註2のユダヤ・イスラエル研究の論文参照。

(11) テル・ゼロールの初期鉄器時代(或は後期青銅器時代末?)の墓域から、副葬品(棺外出土物)としてライオン頭部を形どった土製の「リュトン」が出土した。多分、そのライオンの口には蛇口がついていなかったと思われるが、それは副葬品

として納めるためにつくった模型であったからであろう。実際にそれが使われていたとすれば、多分材料は皮か石であろう。Cf. K. Ohata ed. *Tel Zoror III* (*op. cit.*), p. 72; pl. 59-6.

これが墓域から発見されたことは、ライオン像をとまなう祭祀用具である滑石製小鉢がイシュタールの戦神的側面と結びついていたということ(註2のユダヤ・イスラエル研究の論文参照)と矛盾するものではない。地母神は死と破壊を司ると同時に、大地の支配者として冥界神でもあった。但し、一柱の地母神がつねにこれ等の神性を保ち続けたのではない。

(12) 同上論文参照。

(13) E. Buschor, *Samos 1952-1957, Neue Deutsche Ausgrabungen im Mittelmeergebiet und im Vorder Orient*, Deutsches Archäologisches Institut, 1959, p. 210; p. 209, pl. 11.

(14) 註2のユダヤ・イスラエル研究の論文参照。

(15) H. Walzer, *Orientalische Kultgeräte*, *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts* 74, 1959, pp. 69-74, pls. 115-123. 又、後出のSolomonsonの論文のpl. 29a.

(16) 註2のOrientの論文、四二頁参照。

(17) A. Kozloff, *A Toast to the Gods*, *The Bulletin of the Cleveland Museum of Art*, Feb. 1973, p. 46.

(18) E. Kunze, *Orientalische Schnitzereien aus Kreta, Athenaische Mitteilungen* 60/61, 1935/36, p. 218; cf. p. 222; pl. 84 (14); p. 232. この作品は器体が全体として女性の髀を

形とつらなる。この点で、新王国時代のエジプトの工芸品に通じるものがある。

但し、滑石製のものと同一ジャンルに属するかどうかは、説明文と図版からでは判断し得ない。

(19) Ibid., p. 218.

(20) R. Hampe, *Kretische Löwenschale des Siebten Jahrhunderts v. Chr., Sitzungsberichte der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-historische Klasse*, 1969, p. 18; pl. 17.

(21) Ibid., pls. 1, 2, 3, 6, 7-1, 17-2. 基本的なデータは pp. 9-11.

(22) Ibid., p. 26. Hampe は鉢内に入った液体(香油)について、それはそこに滞留せられたのに対し、オリエントの滑石製の鉢では、それを更に灌奠に用いたとした。彼はその違いの理由として、口縁部の形状の違いを挙げているが、実は両者の口縁部の形に、異った用途を考えなくてはならないほどの構造的差異はなく、両者ともに、流入した液体(シルク)を灌奠に用いるためのものであったとしてきつつかえない。

(23) 容器からチューブを使って液体を飲むという風習は、オリエントに古くからあった。それは聖婚の儀式において用いられ、た(*Reallexikon der Assyriologie*, Art. Heilige Hochzeit [J. S. Cooper], p. 266b; cf. H. W. F. Sagg, *Greatness that was Babylon*, London, pl. 51C; p. 173, fig.)。又、それはアッカド時代円筒形印章の、女神が登場するシーンにも現われる。飲用チューブの使用は地母神の祭儀と特別の関係がある。

滑石製祭祀用具再論

つたらしい。

(24) 上註11参照。

(25) Stucky, op. cit., p. 18; cf. R. Amiran, *JNES* 21, 1962, p. 170, fig. 5, 1-2; A. Parrot, *Syria* 41, 1964, p. 238, n. 1. 両者の類似は直接的な関係を意味しない。

(26) J. W. Salomonson, *Rhein, Mosel, Allier und Tigris, Bemerkungen zu einem Römischen Ringgefäß in Bonn, Archaeologia Traiectina XI*, Groningen, 1976, pl. 28, c-d.

(27) Hampe, op. cit., p. 15f.

(28) Ibid., p. 39.

(29) Ibid., p. 26-40.

(30) Salomonson, op. cit., pl. I, a; pl. 25a. この作品について「データの」 pp. 1f.

(31) Ibid., p. 3; pl. I, b; pl. III, d. (A. D. 50-75).

(32) Ibid., pp. 29-33.

(33) Ibid., p. 31.

(34) Ibid., p. 22.

(35) Ibid., pp. 28; 52; 76, n. 125; pl. 29b. ウン・マル・アマッドの発掘及び文献については拙稿「ウン・マル・アマッド発掘調査報告書の再検討」オリエント100-134、一九六八、八二-一〇二頁参照。

(36) Salomonson, op. cit., pl. 30d; pp. 25; 75, n. 125; A. Arribas, *The Iberians*, London, n. d., pp. 145f.; pl. 21; M. Dames, *The Silbury Treasure, The Great Goddess Redis-*

三三 (一九七)

covered, London, 1976, pp. 76f. 学研版、大系世界の美術、

四、一九七三、図版一四七(解説は柳宗玄氏、三〇六頁)。

(37) 乳首から流出する装置である以上、液体はミルクであったと考えるべきであろう。註2のユダヤ・イスラエン研究の拙論に述べた通り、滑石製小鉢の祭儀において用いられた液体の種類については、水、ビール、香油など諸説あり、本稿において紹介した研究者たちの考えもまち／＼である。筆者はクリーヴランド博物館の滑石製小鉢の研究からミルク説を唱えたが、ガレラの女神像の装置を滑石製小鉢のジャンルと関係づけられるとすれば、それはミルク説を補強してくれるであろう。筆者の友人岡田明憲氏は、イランの地母神アナーヒターに関して次のような御教示を下された。

アヴェスタ中のアナーヒターをテーマとする章には、“hao-hayō gava” という語がしばしば見られるが、“gava” は牛乳の意に解しうる。従って、この二語はハオマを混入したミルクということになる。又、“gaomavant” (ミルクを混ぜた) という語も出てくる。アナーヒターの神性には、水神である他にも、神話中の英雄や王朝の始祖たちの保護者として戦神的側面もあり、又出産や生殖も司る。このように、イランでは地母神の祭儀の供物としてミルクが用いられていたことが分る。これは文献的証拠を欠く滑石製小鉢についての貴重な史料である。

尚、Dames (前註) は乳首には蠟がつめられ、何等かの加熱によってそれが溶けると、鉢からミルクが流れ出る仕掛けで

あった、と記している。

(38) 註2の *Orient* の論文、p. 34 参照。

(39) Salomonson, op. cit., pp. 13-19; pl. 20a.

(40) Ibid., pp. 19-23. 上述三〇頁参照。

(41) E. O. Negahban, *Pottery and Bronze Figurines of Marlik, Archäologische Mitteilungen aus Iran* 12, 1978, pp. 157-173.

(42) Ibid., pp. 162-164; figs. 4-5; pl. 30, 1-2 (女性像); pp. 165f.; pl. 30, 3-4 (男性像); pp. 166f.; figs. 6-7; pl. 31, 1-2 (男性像)。

(43) 註2の拙稿参照。